

週刊

# 夢の窓

No.9



むうにい

## 隣人があいさつにやって来る

---

日曜日の朝、トラックの荷の積み卸しの音で目が醒めた。空き家だった隣に、新しく住人が越してきたらしい。

ほどなくして、チャイムが鳴った。わたしはパジャマ姿のまま、玄関の戸を開ける。

「はい、どちら様でしょう？」

戸を開けたにもかかわらず、目の前は暗い影が差したままだ。おかしいな、朝だと思ったけれど、実は夜だった、そんなオチなのかな。

パオオオンツという音とともに、やたらとでかい声が轟いた。

「おはようございますうっ。わたしらあ、隣に越してきた者ですうっ」

水玉模様のスーツを着たマンモスが、そこに立っていた。ワイシャツの襟からは、シュロのような剛毛がぼうぼうとはみ出ている。

わたしは啞然として見上げていたが、はたと礼儀を思い出し、

「あ、おはようございます、むうにいとこのものです」とおじぎを返した。

「これはあつまらないものですがあ、よかったらあ、召し上がってくださいあい」マンモスはそう言って、器用に丸めた鼻先で、贈答用に包まれた箱を差し出す。

「これは、ご丁寧に、ありがとうございます」わたしはもらい物を軽く振ってみた。この重さ、そうめんかな？

「わたしらあ、シベリアから来たばかりでえ、この辺のこと何んも知らないんですがあ、どうかいろいろとお、教えてくださいっ」パオオンツと紋切り型の挨拶をし、立派な牙が地に着くほど深々と会釈をするのだった。

マンモスと話すのはこれが初めてだったが、礼儀正しい、付き合いやすそうな連中である。

「近くにマンモス団地もあるので、きっと住みやすいと思いますよ」わたしは答えた。愉快的隣人が来たものだ。

それにしても、あんなに大きな体で、家には入れるのだろうか。

心配になったわたしは、カーテンの隙間から隣をのぞいてみた。

彼らは4頭家族で、挨拶に来たのは一家の主らしい。どうやって中に収まったのか、キッチンではマンモス奥さんが鼻で包丁を握り、味噌汁に入れる大根を、トントン、トントンと刻んでいる。

庭のブランコでは、幼い兄弟達が、チェーンをみしみしといわせながら揺られているのが見えた。

まあ、他人が心配することでもないか、わたしは思い直し、カーテンを閉める。

もらった包みを開けてみると、輪切りにされた真空パックの肉が入っていた。「シベリア直送、新鮮マンモス肉」と書かれたラベルが貼ってある。

「へえー、これが噂の『あの肉』か。まさか、家族の肉じゃないだろうね」

冷蔵庫にしまって、あとで友達を呼んでみんなで食べてみよう。

お隣では、ちょうど朝食が始まったようだ。4つつの音がパオーンッと合わさり、わたしの部屋にまで届いてくる。

「いただきマンモスっ！」

## 火を吐く大怪獣登場！

---

ホテルの1室で目が醒める。枕もとの時計を見ると、10時を少し回ったところだった。カーテンの隙間からはまぶしい光が漏れている。今日もいい天気のように。

いきなり、ズシンッという強い振動を感じた。やや間を置いて、部屋がゆら～と揺れる。「地震っ?!」わたしは慌ててベッドから飛び下りる。するとまた、激しい地鳴りが響く。そしてぐらぐらと揺れるホテル。

まるで、巨大な杭打ち機で地面でもつついているかのようだ。

窓まで行き、カーテンを開けて外の様子をしてみる。ビルの密集する大都会が広がっている。数百メートルほど先で、何と、大怪獣が暴れていた！

カボチャそっくりの頭、四方にパッキリと開いた、大きな赤い口。そこから定期的にマグマの塊を吐き出しているのだ。

マグマは家ほどの大きさもあり、周辺の建物はひとたまりもなく崩落してしまう。悪夢のような怖ろしい光景だった。

「大変だ、早くニュースを見なくちゃっ」わたしはテレビを付けた。NHK、日テレ、TBS、朝日、どのチャンネルもライブ中継で報道をしている。東京テレビだけは、いつも通りにアニメを放映してた。

各テレビ局は、それぞれ別のアングルで映像を流し続ける。おかげで、どこがどれだけの被害を受けているかなど、状況が把握しやすい。

「自衛隊はまだ来ないのかなあ。このままだと、辺りは廃墟になっちゃうよ……」わたしは心配で居ても立ってもいられなかった。案外、世界の終わりというものは、こんなふうに始まるのかもしれない、そう考えたりもした。

大怪獣はその場を動かさず、ただ周囲にマグマを飛ばしていた。吐く時に、ドシューーンッという衝撃音がし、建物を破壊するたびに、地響きと振動が起こる。

怪獣を中心として、ドーナツ状に炎が上がっていた。その炎も、次第に外側へと広がっているように見える。

「この際、ウルトラマンでもいいから来てっ！」わたしは祈るような気持ちで声に出した。あんな怪獣がいるのだから、ウルトラマンだってきっと存在するに違いない。

怪獣のはるか頭上で、何か銀色のものが光った。

まさか、本当にウルトラマンが?!

雲ひとつない青空の中、日の光を受けて輝きながら、それはどんどん大きくなっていく。どうやら、怪獣めがけて落ちてくるようだった。

「あれは、まさか……」初め、空飛ぶ円盤かと思った。雑誌で見たU F Oの写真そっくりだ。けれど、地上に近づくにつれ、次第に形がはっきりとしてくる。「やっぱり、そうだ。あれは、コントでお馴染みの金ダライだっ！」

金ダライは、ゴオオオ〜ンっと派手な音を立てて、怪獣の頭を直撃した。「グウェッ！」と叫んで、そのまま押し潰されてしまう。

各局のレポーターたちは、ポカンと口を開けたまま言葉を失った。

「平和が戻ってきた……？」あまりに突然のことで、頭のなかの整理が追いつかず、どこまでが現実なのかわからなくなってきた。

テレビでは、NHKが慌てたように続報を伝え始める。

「た、ただ今入った情報によりますと、都心に出没した未知の巨大生物の頭上に、これまた巨大なタライが落下し、これによってこの巨大生物は絶命した模様です。繰り返し、お伝えしますー」

例のチャンネルに換えてみると、アニメの画面の上の方に、申しわけ程度にテロップが流れていた。〈東京に「四面怪獣・フォーフェイスが現れ、金ダライでノックアウトされる……〉

何もかも、平常運転。明日も晴れるといいな。

## 歌舞伎町に山ができる

---

新宿・歌舞伎町に、一夜にして山ができた。

「これは登るしかありませんねえ」友人の志茂田ともるが、ぽんっとわたしの肩を叩く。

「おれは行くぜ、誰が何と言おうともなっ」桑田孝夫の顔には、固い決心が浮かんでいた。

「え～、行かなきゃダメ？」一方、わたしはあまり気乗りがしないのだった。「けっこう登るよ？ 身延山って登ったことある？ あの階段、本当に大変な思いをしたんだ。ぱっと見、それよりもまだ高そうだけど……」

2人は呆れたようにわたしを見下ろす。

「ここまで来て、何を言ってるんですか。むうにい君、今こそ、そのたるんだ心を鍛え直す時です」

「そうぞ。わかったら、さっさとこいつを担げっ」

桑田は持ってきた金棒の1本をわたしによこす。ずっしり重い。なんといっても、むくの鉄の棒だ。

「こんなの持って登って、どうするのさ？」金棒が肩にめり込んで痛い。

「手ぶらで行くつもりですか、むうにい君。富士山の登山だって、杖を持っていくじゃあ、ありませんか。それと同じことです」至極当然のように志茂田は言う。彼の言葉は、いつだって妙な説得力がある。

「わかった、言う通りにするよ」

「おれが言っても、まるで聞かねえくせにな」桑田が面白くなさそうに、ぶつくさと言う。

志茂田を先頭に、桑田、わたしの3人は「歌舞伎町新山」を、えっちら、おっちらと登っていった。何しろ急ごしらえの山だ。道なんてあるはずもなく、ごつごつとした岩の間を、しがみつくようにして這い上がっていく。

「今、金棒から手を離したら、そのまま都庁まで滑り落ちていくんじゃないかな」わたしは息を切らせながらぼやいた。実際、持つ手がしびれて、きりきりといっている。

「ばかなことを言わないで下さい、むうにい君。転がり落ちたとしても、せいぜい、ゴールデン街入り口まででしょうに。どちらにしても、金棒をしっかり担いできてくださいね」

「ところでさ、登った先には何があるの？」わたしは聞いた。

「おまえ、そんなことも知らずについてきたのかよ」桑田は大げさに驚いた顔をしてみせる。「聞いたか、志茂田。こいつ、なんにも知らねえんだってさ」

「いやはや、これはこれは」

「黙ってついてこい、って言ったのはそっちじゃん。別に登りたくなんかなかったのに……」

「いいか、よく聞くんた。山頂には、『この世で一番うまいラーメン屋』があるんだ。おれたちは、その店を目指して登っているのさ」

ラーメン屋なんて、いつの間にできたんだろう。でも、この世で一番うまいのか。それなら、行くしかない。

「わかった。頑張る、ついていくよ」はっきりとした目的がわかって、わたしはやる気を出した。

中腹まで来たところで、突如として赤鬼が現れた。

「お出ましたっ」桑田が先頭に躍り出て、赤鬼に先制攻撃を仕掛ける。「正義の金棒を喰らえっ！」

2度3度と、金棒がぶつかり合う甲高い音が響く。そして、桑田の金棒が、見事、相手の脳天を捉える。赤鬼は、キュウツと叫んで、その場で倒れた。

「桑田、強っ！」わたしは目を見張った。

「なあに、たいしたことはない。しょせん、三流の『味噌ラーメン』の化身にすぎねえ」

さらに進むと、今度は青鬼が物陰から飛びかかってきた。志茂田は素早く金棒を持ち替えると、鬼の腹に強烈な突きをお見舞いした。

「来る頃だと思ってましたよ」よろめく青鬼の股間めがけ、渾身の力を込めて金棒を振り上げる。「必殺技、鬼に金棒っ！」

鬼はたまらずその場に崩れ落ちた。あれって、相当に痛いらしい。お気の毒に。

「青鬼は『塩ラーメン』の化けた姿なのですよ、むうにい君」志茂田は金棒を担ぎ直す。

そろそろ頂上が近づいてきた。立派な御殿が見える。

「あれが『この世で一番うまいラーメン屋』かっ」わたしは疲れも忘れ、駆け出した。

「あ、お待ちなさい、むうにい君っ」志茂田が呼び止めるが、すでに遅かった。

「げははっ、待ってたぞお〜っ！」ピンク色の鬼が立ちはだかった。

「わあっ！」びっくりして転けそうになるわたし。けれど、よく観察してみれば、これまでに登場したどの鬼よりもひ弱だった。背も150センチあるかないかだし。

これなら勝てる、そう確信したわたしは、金棒を肩から下ろし、振り上げた。

「これでも喰らー」

ところが、金棒は思いのほか重く、振り上げた拍子に、そのまま後ろへ倒れてしまう。

「残念だったなっ。おまえの負けだ。わしのところのとんこつラーメンをたらふく、喰らわせてやるぞっ」

桑田と志茂田が追いついてきて、わたしを残念そうに見つめた。

「だから、待てと言ったのに。ほんとにあなたは、人の言うことを聞きませんね」

「ばっかだなあ、むうにい。こんなところでとんこつラーメンなんか食ってみろ。せっかくの『この世で一番うまいラーメン』が、もう腹に入らねえじゃねえか」

わたしはピンク鬼に首根っこをつかまれて、店の中へと引きずられていった。

悠々とラーメン御殿に入っていく2人を、うらやましそうに見つめながら。

## アインシュタインの新理論を聞かされる

---

調べものがあって図書館に寄った。

スマート・フォンが、今後、わたし達の生活にどれだけの影響を与えるのか、その動向を知りたいと思ったのだ。

「えーと、この本から見てみるとしようかな。『アンドロイドは電気林檎の夢を見るか?』」

席に着いてしばらく読んでみたが、わかりきったことしか書いてないので、すぐに退屈してしまう。頬杖をついて向こう側のテーブルに目をやると、どこかで見たような顔があった。

「誰だったっけかなあ。よく見かけるんだけど……」

2度3度、おでこをこづいて、ようやく思い出す。アインシュタインだ。

世紀の有名人に巡り会えた幸運に感謝して、わたしはそばに駆け寄った。

「あのう、アインシュタイン博士でいらっしゃいますよねっ？」

アインシュタインは読んでいた本から顔を上げ、にっこりとうなずく。

「ええ、いかにもわたしがアルベルト・アインシュタインです」

わたしはうれしくなって、思わず握手を求めてしまう。アインシュタインは、大きな手で力強く、握り返してくれた。

「こんな小さな図書館なんかで、何を読んでらしたんですか？」わたしは尋ねた。

アインシュタインは本の表紙をわざわざ見せてくれる。

「なあに、大昔に書いた自分の本ですよ」

「あ、『相対性理論』ですね。でも、なぜ……」

「なんせ、あの時分は大急ぎで書いたものでしてね、誤字・脱字がなかったか、ずっと気にかかっていたのです」

アインシュタインほどの人物でも、そんな些細なことが気になるものなのか。わたしは、このエキセントリックな博士がますます好きになった。あまりにも人間臭い。

「ところでね、あなた」アインシュタインは、改まった口調で切り出す。「わたしは、またまた新しい理論を思いついたんですよ。よかったら、ちょっと聞いていただけますかな？」

「ええ、ぜひ！」驚きとまどいながらも、この上もなく光栄なことだと感激した。

「おおっ、ありがたい。ニーチェの永劫回帰は、実は特殊相対性理論から導き出せる、そう確信を得たのですよ。少し長くなりますが、どうか、最後までお聞き願いたい」

アインシュタインは語り始めた。

「われわれの住むこの宇宙は有限と考えられます。そして、幾度となく繰り返されているわけです。それぞれは有限であっても、その繰り返しが永遠に続く。つまり、宇宙は無限、ということになります……」

窓から夕日が差しこみ、やがて夜になる。再び朝がやって来て、長い1日が過ぎ、日が傾く。

アインシュタインの言説は始まったばかりだ。

「……すなわち、ニーチェは哲学的な視点に立って、これらのことを説いたのです。科学も哲学も、宗教も芸術も、根幹のところでは全てが1つです。最終的に、求めているのは同じというわけなのです」  
そう締めくくって、ついに新理論は何もかも吐き出された。

気がつけば、あれからすでに100億年もの歳月が過ぎ去っていた。

わたしは最後に質問を投げかけてみた。

「では、命あるものは誰も、『永劫回帰』に捕らわれたままなのではないでしょうか？」

博士は静かに首を振るのだった。

「『永遠』といえども、振り返ってみればあっという間ですよ。やがて来るその時こそが、『真の終わり』と言えましょう」

## 成層圏を遊覧する

---

1万人乗り大型航空機は、成層圏を流れるように航行しているところだった。

「お客様、左下に見えますのが南極でございます。ただいまは昼間のためご覧いただけないのが残念ですが、夜間には眼下にオーロラが輝く様子をご覧いただけます」

CAが、まるで遊覧バスのガイドのように観光案内を務める。彼女はタコそっくりの姿をしていた。ピンクの制服に縫い付けられた胸のアプリケも、タコのような生物がモチーフである。

この航空会社は、火星人が運営してるのだ。

CAは昔を懐かしむような口調で続ける。

「わたしどもが初めて地球を訪れたとき、この惑星はまだ単細胞生物の住む、原始的な星でした。わたしどもは進化を促すために、ほんのちょっとだけ手を加えさせてもらいました。そのときの研究班に、何を隠そう、実はわたしも参加しておりました」

わたし達地球からの乗客は、おおっ！ と感嘆の声を上げた。

1人の青年が、

「そこから今日に至るまでは、おそらく何千万年もかかったと思うんですが、何のために人類へと進化させたんですか？」と無邪気に尋ねる。

「はい、10億年以上もかかりましたが、それだけの価値はあったのです。わたしどもは、あなたがたとビジネスを行うことが目的でした。そして、今ではこうして、公正な取引が実現できました」

わたしたちは惜しめない拍手を送るのだった。

上機嫌の中年男性が、口笛で「熊ん蜂の飛行」を吹き始めた。ただでさえ難しいこの曲を、さらに3割アップのテンポで器用に奏でる。

音程も正確で、リズムに狂いはないのだが、すきっ歯からもれるシューシューという空気の音が、何ともいえず耳障りである。

そんな男を、CAはやんわりと注意した。

「お客様、大変に申し訳ありませんが、成層圏での口笛はご遠慮下さいませ」

中年男性は口笛をやめ、少し恥ずかしそうに頭を掻いた。

「地球の近辺も、大昔のように静かではなくなりました。あちらこちらの銀河から、安住の地を求めて、エイリアン達がさまよいて来るのです。彼らの中には、心穏やかではない者たちも少なからず存在します。成層圏より上での口笛は、そうした連中をいたずらに呼び込んでしまうことがございます」

やがて、わたし達の乗る船は、地球の夜の側へと入っていった。大部分が漆黒の海だったが、陸地にはところどころに光が点在している。

「あれらの点が、それぞれ1つの街なんだなあ。宇宙から見る地上って、つくづくちっぽけだ。1人1人なんて、この上もなくはかない気がしてくるよ」わたしは感傷的な気持ちになった。

その時、航空機と並んで浮かぶ、奇妙な光の存在に気づいた。ボウフラによく似た姿をしている。

「あの一、窓の外に変なものが飛んでますが、あれは何でしょうか？」わたしがそう言うと、CAはもよりの窓から外の様子をうかがった。

いくぶん、困惑したような表情で、

「先ほどの口笛で、通りすがりのエイリアンの気を引いてしまったようですね。願わくば、無茶をしない種族でありますように……」

巨大なボウフラは、航空機の回りを数度ばかり旋回すると、やがて離れていった。好奇心旺盛な仔犬が、ぷいっとおもちゃに飽きてしまった時のように。

ああよかった。わたし達の地球に寄生して、いつの間にか血を吸われるのでは、と心配だったのだ。

## 最新式のワープロ

---

差出人のない封筒が届いていた。

中身は手紙だったが、読むのにも苦勞するほど字が汚い。

〔 拝啓 むうにい様。あなたに すごいものを ぷぜれんとしよと 思います。 つきましては 3丁目の「1本松公園」の 「ゾウのすべりだい」 の前まで 来てほしです。 ただし 必ず 1人で来ること。 お待ち してるます。 かしこ 〕

見るからに怪しい。「すごいプレゼント」って、いったい何なのだろう。本当にあげたいと思うのなら、手紙なんか書かかず、そのまま送ってくれたらいいのに。

それに、「1人で来い」とは、いかにも物騒な。まるで、身代金目当ての犯人と取り引きでもするみたいだ。

わたしは手紙を破って捨てようとした。

(「1本松公園」って、確か角を曲がってすぐの公園だったっけ……)

駅に向かう途中にあるので、よく脇を通る。その真ん中には、ピンク色の「ゾウの滑り台」があつて、とても目立っていた。

「あそこか。ちょっと、のぞきに行ってみようかなあ」手紙を折りたたんで、ポケットにねじ込む。

公園に行ってみたが、誰もいなかった。普段なら、小さい子を連れてお母さん達が数人集まっているのだが、猫1匹見当たらない。

「ゾウの滑り台」のすぐ下には、アタッシュ・ケースほどの小包が置かれていて、あの下手くそな字でメモが貼られていた。

〔むうにい様へ。 このぷぜれんとを 受け取てくさい。 〕

どうしようかなあ。中を開けたら、ドカンッていうのは困るし。

でも、名指しでメモが貼られていては、このままほったらかし、というわけにもいかないしなあ…  
…。

5分くらい悩んで、持って帰ることにした。運んでいる最中に爆発するかもしれないので、できるだけ人通りの少ない道を選びながら。

部屋に戻ってからも、小包の前で考え込む。耳を当てても、カッチコッチどころか、うんともすんとも言わない。振ったり逆さまにしたりとするが、コトリともしなかった。

「よーし、勇気を出して開けてみよう」ゴクリとつばを飲み込むと、一気に包みを剥がす。

中から現れたのは、ワープロだった。バースデー・カードが添えられていて、ミミズの這ったような字で

〔はっぴい・ばあすでえ、むうにい！〕

と書かれていた。

ああ、誰かがわたしの誕生日を覚えていてくれて、それでこれを贈ってくれたのか。

それにしても、今どきワープロって。

ノートブック型のワープロだったが、キーボードは一切排除され、代わりにタッチパッドが付いている。付属の専用ペンで入力するらしい。

わたしは、マニュアルにざっと目を通す。

「なにに、『このワープロは手書き入力専用です。それ以外の方法では、絶対に使用しないで下さい』」

それ以外に選択なんてないだろうに、わたしは心の中でつつこむ。

しばらくいじり回すうち、あることに気づいた。

このワープロには変換機能がないのだ。「こんにちは」と入力しても、「今日は」にはならず、ひらがなのまま。

それどころか、文字の認識すらしてくれず、ただペンで綴ったその通りを表示するだけだった。

当然、誤字は誤字のままである。

試しに入力して、印刷ボタンを押してみた。

〔なに このワープロ。 ぜんぜん 使えないじゃん。 これなら いちいち ワープロなんか使わなくたって 手書きでもいいと思う な。 〕

お世辞にも、上手とは言えない字で出力される。見慣れたわたしの字だった。

わたしはワープロを箱に戻し、拾ってきた公園に返すことにした。

〔はいけい おくりぬす様。 わたしの誕生日を 呪ってくさだって ありがおうごぜます。 このワープロは わたしには もたいたいと思いますので お返し するします。 どうか お持ちかりえ ねがます。 むうにい。〕

まるで幼稚園児の書いたようなメモを、箱の上にテープでしっかりと貼りつけた。

## 半魚人が攻めてきた

---

街に半魚人が攻めてきた。数百、いや数千匹だろうか。とにかく、すごい数だ。  
連中は、上半身がドジョウ、下半身が人間の姿という、実に奇っ怪なモンスターだった。

「むうにっ！」誰かがわたしを呼ぶ。振り返ると、桑田孝夫が駆けてくる場所だった。  
「ああ、桑田。大変なことになっちゃったね。自衛隊はいつ頃来ると思う？」わたしはやきもきした気持で言った。

「さあな。自衛隊を待つ間、まずはおれ達にできることをしようじゃねえか」

桑田はバッグの口を開けた。ぎっしりと武器が詰めこまれている。

「また、ずいぶんと持ってきたね。職務質問にあつたら、しばらくは帰してもらえないかも」

「ばか、今はそれどころじゃねえだろ。ほれ、お前はこれとこれを持ってろ。アイトールのジャングル・キングとウージー」そう言って、ナイフと機関銃をわたしによこす。

「機関銃なんて使ったことないよ？ それに、ナイフならうちにも包丁があるし……」

「ウージーなんて、ガキでも使えるぞ。それに、お前んとこの包丁、あんな先の丸まった奴で、いたい、どうしようってんだ」

そうこうしているうちに、半魚人はわたしたちの住む一画まで押し寄せてきた。

「よっしゃむうにい、奴らに鉛の弾をお見舞いしてやれっ！」そう叫ぶなり、桑田は半魚人に向かって撃ち始める。わたしも見よう見まねで引き金を引く。

下手な鉄砲も数打ちゃ当たる、というけれど、さっぱり当たらない。

「くそおっ、あいつらドジョウだから、のらりくらりとかわしやがるぜ」桑田は歯ぎしりをしながら吐き出す。

「ねえ、桑田。ここはいったん逃げて、誰かに相談しない？」とわたしは提案する。このままでは、とても勝ち目がない。

「だな。そうしようっ」

わたしにはアテがあった。

「町外れにさ、『妖怪ポスト』を見つけたんだ。鬼太郎に応援を頼もう」

「何っ、鬼太郎か？」桑田が驚いたような声を出す。「なるほど、そいつはいいや。モンスターには妖怪で対抗というわけだな。よし、すぐに手紙を出そうぜ」

わたしはコンビニで便箋と封筒を買って、さっそく救援の手紙を書いた。それを町外れにひっそりと立つ、妖怪ポストへ放り込む。

「これでよし、っと。あとは鬼太郎が来てくれるのを待つだけだね」もうすでに解決したも同然だった。わたしはほっと、一息をつく。

その日のうちに手紙が戻ってきた。「料金不足」と判が押してある。

「あっ、しまった。切手を貼るの忘れてた」

「おまっ、何やってんだ」桑田が呆れる。「どうすんだ？ 今から出しても、もう間に合わねえぞ」

ただでさえ焦っているのに、この日はばかに気温が上がった。もともと働かない頭が、さらに鈍くなる。

半魚人の進撃が滞ってきた。しばらくすると、全員が方向転換をして、森の方へと、慌てて走っていく。

「どうしたんだろう？ みんな、どこへ行っちゃうの？」わたしは逃げていく半魚人を、困惑した面持ちで見つめた。

「うーん、どうやら湖に向かっているらしいな。そうか、奴ら、暑いもんだから、水に逃げ込むつもりだな」

わたしは、はたと思いついた。

「そうだ、湖に豆腐をどんどん、放り込んだらどうだろう」

「豆腐をか？」

「こんなに暑いんだもの、ひんやりとした豆腐に潜ろうとするんじゃないかなあ」

「ほほう。で、そのまま湖の水を煮込んでしまうってわけだな」桑田はわたしの案を察する。

さっそく、町中に呼び掛けて、ありったけの豆腐を湖へ投げ入れた。

思った通り、ドジョウ人間達は、冷たい豆腐の中に身を隠すのだった。

「それ、今だっ！」今度は町民みんなして、真っ赤に焼いた石を次々と放り込む。

「うまいこと考えたな、むうにい」桑田が肘でわたしをつつく。

やがて、辺りにおいしそうな匂いが漂い始めた。

週刊 夢の窓 No.9

<http://p.booklog.jp/book/87102>

著者 : mueny

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/mueny/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/87102>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/87102>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社 : 株式会社ブクログ